
トリスティンで一番喧嘩を売ってはいけない男

二次元からの使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリステインで一番喧嘩を売ってはいけない男

【Nコード】

N3676K

【作者名】

二次元からの使者

【あらすじ】

これは原作よりも少し大人しい静雄とルイズが織り成す歪んだお話し。

初めての作品なので、誤字脱字などで読みにくいかもしれませんが温かく見守ってください。あと静雄の感じが原作と違うので、原作のカッコイイイメージを壊したくないのなら読まないほうがいいと思います。

プロローグ（前書き）

こんなのですがよろしくお願いします。

プロローグ

池袋という街は非常に賑やかである。

今日も変わらず街は動き続ける。

そんな街の一角で叫び声をあげる少年がいた。

「いっ—ざあっ—やあっ—!!」

平和島静雄である。

彼はいつもどおり宿敵折原臨也を追いかけていた。

その理由は極めて単純ただ気に食わないのである。

「待ちやがれ!!」

「待てと言われて待つやつはいないとおもけどね!」

臨也はそんな事を叫びながらも『パルクール』の技術を使い逃げていた。

「るっせえー!!」

そう叫びながら静雄は近くにあった自動販売機を臨也にむかって『投げた』

それはもう見事な放物線を描いて飛んでいったが、時すでに遅し臨

也はすでにそこにはいなかった。

「いつーざあっーやあっー!!」

池袋に本日二回目となる大絶叫が響いた。

街は動き続ける。例えば人が一人消えたとしても……

これは人との触れ合いを恐れる少年とプライドの塊の少女との歪んだお話し。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？・・・はいみなさんの文句がどんどん聞こえてきます・・・（泣）

ですが自分なりに頑張って成長していききたいので、みなさん応援よろしくお願いします！！

第1話 喧嘩人形とゼロの邂逅（前書き）

とりあえず続き書きました

第1話 喧嘩人形とゼロの邂逅

「あんただれ？」

雲のない青空をバックに桃色の髪の毛の目つきの鋭い美少女と呼んで差し支えない少女が静雄に聞いてきた。

「お前こそ誰だ」

当然といえば当然な事を言いながら静雄は顔を上げた。

「どこの平民？」

「無視かよ……」

そう嘆息しながら今の自分の状況を確認する。

（つーかオレ気イ失ってたのか。）

次に周りの状況を確認しようとサングラス越しに周りを見渡した静雄は文字どおり言葉を「失った」

（おいおい……一体全体何がどうなってやがる……。）

まあ無理もない。周りの風景は現代の日本、それもかなり賑やかな町とよべる池袋にいる人間がつれてこられるには、いささか衝撃的な風景だった。

まず目にはいったのは、ハリーなんちゃらかいっ映画に出てきそ

うな城のようなものだった。その次に目にはいったのはマントを羽織った妙な連中だった。するとその中の何人が何か言い始めた。

「ゼロのルイズが『サモン・サーヴァント』で平民を召喚したぞー」

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

すると桃色の髪の少女以外の全員が笑った。

「ちよつと間違っただけよ！」

桃色の髪の少女がきれいな声で怒鳴った。

「間違いつていつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」

誰かがそそんなことを言うとみんなが爆笑し始めた。

そんなやり取りを見ながら、静雄は考え始めた。

（マジでどこどこだよ！俺は確かいつもどつりあのつじ虫野郎をぶつ殺そうと追いかけていたはずだよなあ？）

そんなことを考えながら静雄は一時間ほど前のことを思い出していた・・・

静雄が少女に召喚される約一時間前・・・

2011年10月某所にて静雄は臨也のことを追いかけていた。まあ彼らにとってはいつものことである。

「いっーざあっーやあっー!!!」

静雄がそう叫ぶと臨也はそれを鼻で笑った。

「ハハッ」

それがまた静雄の怒りのボルテージを上昇させる。

「殺す殺す殺す殺す!!」

そんなやり取りをしながら全力で二人が走っていると、突然静雄の目の前に光る鏡のような物が現れた。

急なことに驚いた静雄が足を止めようとしたが人間というのは、急には止まれないものである。静雄もまたその例に漏れずそのまま鏡の中にダイブしてしまった。

鏡の中にはいった瞬間静雄はそのまま気絶してしまったのである。

そんなことを思い出しながら静雄は頭を抱えた。

（あー・・・あん時の鏡が原因か・・・にしてもなんだったんだあの鏡？）

そんな風に自分の不運を嘆いていると、ルイズと呼ばれる少女とハゲた変な格好をしたおっさんが何か騒いでいた。というよりおっさんがルイズを説得しているようだった。

静雄がそんなやり取りを冷めた目で見ているとルイズがこちらにやってきた。

「ねえ」

「あん？」

「あなた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

そんなことを言い始めたルイズは杖を静雄の前で振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、われの

「使い魔となせ」

呆気にとられている静雄の目の前でルイズが呪文のようなものを唱え始めた。

そしてゆっくりと顔を近づけてきて。

「おい！」

「ん……」

そのまま唇を重ね合わせた。いわゆるキスというやつである。

「おい！いきなり何しやがる！！」

そう叫びながら静雄は飛び起きた。

「終わりました」

静雄を無視しルイズは報告し始めた。

正直静雄は本当に疲れていた。よくわからないままにこんな所につれてこられて、拳句の果てに見知らぬ外人さんにキスまでされたのである。

さすがの静雄もあせり始めていた。

（おいおいもしかしてオレやばいことに巻き込まれていねえーか？）

するとルイズが言い争っているのが見えた。

(ああーうるせえ。ぶっ飛ばしちまうか?)

そんな物騒なことを考えていた静雄の体が妙に熱くなってきた。

「あっちいー!」

「すぐ終わるわよ。待ってなさいよ。『使い魔のルーン』が刻まれているだけよ」

「刻むな!俺の体に何しやがった!!!」

「あのね?」

「あんだよ!」

「平民が、貴族にそんな口聞いていいと思ってるの?」

そんな風に言われた静雄は混乱していた。

そんな中ハゲたおっさんが静雄の左手を見ていた。普段の静雄ならそれだけでぶっ飛ばしていたかもしれないが、今の彼は混乱していてそれどころではなかった。

(貴族?平民?名に言ってやがんだこいつ)

おっさんは静雄の手の妙な文字のようなものを見ながら呟いていた。

「珍しいルーンだな」

そういうとおっさんは周りの人たちに向かっていった。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

そんな事を言うとおっさんが宙に浮いていった。

他の連中も一斉に宙に浮いていった。

静雄が啞然としてしていると、ルイズがまたも何か言い争っているが静雄の耳には入ってこなかった。それほど回りの行動は衝撃的だったのである。

「あんだ、なんなのよ！」

ルイズがいきなり聞いてきた。そこでわれに帰った静雄が聞き返した。

「何か言ったか？」

「あーもういいわ！とにかく来なさい！」

そんな怒気を含んだ声をしながら静雄の手を引いて塔のほうまで歩き始めた。

（オレはいつたいたいどうなっちまったんだ。・・・どうすりゃいいんだよまったく）

手を引かれながら静雄はそんな事を思っていた。

出会うはずのない二人が出会い歪んだ物語が幕をあける……………

第1話 喧嘩人形とゼロの邂逅（後書き）

自分なりに頑張って書いたつもりなんですけどどうでしょう？感想
くれると嬉しいです。

本作においての平和島静雄とその他（前書き）

とりあえずの説明です。

本作においての平和島静雄とその他

本作においての平和島静雄の原作と変わっているを設定を紹介します。

まず静雄は高校生です。

髪も金じゃなく黒です。

このときからサングラスをかけています。

あとはおそらく原作と同じになると思いますが、ところどころ変わっていつてしまうところがあるかもしれません、そこはおおめにみてください。

そのほかの人物もおそらくは原作と一緒にだと思えます。はい。

こんなところでしょうかね。

駄文ですが皆さん応援よろしく願います。

第2話 現状説明（前書き）

何かめっちゃくちゃな文になってしまいました・・・

これからだんだん読みやすくなると思うので、どうか見捨てないで
ください・・・

第2話 現状説明

静雄は授業についてこいとつるさいルイズに少し考えたいことがあると、いって適当にあしらいつ、塔の外壁によりかかっていた。

「これからどうすればいいんだか・・・はああ」

静雄は先ほど目にしたドラゴンっぽいものやらやたらデカイトカゲのようなものなどつまり不思議生物と人が宙に浮いていた現象についてあれこれ考えていた。

（つーかあれだよなあ？やっぱりオレのいた場所とは違うんだよなあー）

「はあー」

静雄があれこれ考えていると、塔の中からルイズがやってきた。

「やっと見つけた。こっちに来なさい」

「どこに行くんだよ」

「私の部屋よ」

「はあー」

「まったくいいから早く来なさい。あんたを外に置いていくのはさすがにかわいそうだからね」

「わーっ たよ」

そう言いながら静雄はルイズについていった。

ルイズの部屋

「それほんと？」

ルイズが疑わしげに聞いた。

「嘘言つてどおーなる」

静雄はそお言いながら頭を抱えた。そして今自分のおかれている状況について考え始めた。

（まず、何だあれだここは地球じゃない。大体月が2つある時点で地球じゃない・・・はあまったくどおなっているんだか。つーかもう夜だよなあー。幽のやつ心配しているよなあー。まあ臨也のやつにあわないのはいいかもなあ・・・ってそんな卑屈になってる場合じゃない）

静雄は自分のいたところを思い出していた。

「信じられないわ」

「オレだって信じたくねえー」

「別の世界って、どういこと？」

「魔法使いがない。月はひとつ」

「そんな世界がどこにあるの？」

「オレの元いたところはそうだったんだ」

相手が男だったならとくにキレているがまあ相手が女でかなりの美少女だったのでそれなりに落ち着いていた。

「まったくなんでこんな平民なんか召還しちゃったんだろう」

「だれが平民だ！誰が」

「だってあんたメイジじゃないんですよ。だったら平民じゃない」

「思ったんだがそのメイジとか平民ってのは何なんだ？」

「もう、ほんとにあんた、この世界の人間なの？」

「だから違っちゃって言うてるんだが・・・はあ分かった信じるしかないさそうだな」

「何よその言い方」

「ちなみに聞くが帰る方法はないのか？」

「無理」

「どうしてだ」

「だって、あんたはわたしの使い魔として、契約しちゃったのよ。だからもう何だろうが動かせない」

「マジかよ……」

「ほんとに、別の世界から来たっていつの？」

困ったように、ルイズが言った。

「まあな」

静雄は頷いた。

「なんか証拠見せてよ。」

静雄はズボンのポケットに手をいれ携帯を取り出した。

「何これ」

「携帯電話」

静雄は言った。

「確かに見たことがないわね。何のマジックアイテム？」

「魔法じゃない。科学だ」

静雄は折りたたみ式携帯を開けて見せた。

「うわあ、なにこれ？」

「画面」

「綺麗ね……。何の系統の魔法で動いてるの？風？水？」

「か・が・く・だ！」

きよとんとしてルイズが静雄に聞いた。

「カガクって、何系統？四系統とは違うの？」

「だから！魔法じゃねえー」

「ふーん、でもこれだけじゃ、わかんないわよ」

「何故だ。こっちにもあるってのかよ！携帯」

「ないけど……」

「立ったら素直に信じとけ！！」

「怒鳴らないでよ！！わかったわよ！信じるわ！」

「マジか？」

「信じるって言ってじゃない！」

「何だっていい。あとはどうするかだな・・・なあもう一回鏡みたいなの出してくんねえーか？」

「『サモン・サーヴァント』の事？ だったら無理よ」

「何故？」

静雄は不服そうに聞いた。

「もう一回使うにはね、使い魔が死ななくちゃいけないのよ。」

「それはマジなのか？」

「死んでみる？」

「やめとく」

静雄は珍しくうなだれながら、左手の甲に描かれた文字を見つめた。

「ああ、それね。それは私の使い魔ですっていう、印みたいなものよ」

静雄は諦めてルイズのほうを見た。

静雄から見てもかなり可愛らしい顔をしていると思った。

「わーったよ。使い魔とやらをやってやるよ」

「なによそれ」

「文句あんのか」

「口の利き方がなつてないわ。『なんなりとお申し付けください、ご主人様』でしょ?」

「うるせえー。そんな簡単に口調は変わらない。大体使い魔っていつでも何するんだ?お前を守ればいいのか?まあそれぐらいなら余裕だな」

「それもあるけど、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「つまり俺が見たり聞いたりしたことを、お前も見たり聞いたり出来るってことか?」

「でも無理ね何も見えないもの!」

「それで終わりか?」

「それから主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「そんなもんできん」

「だから、あなたにも出来ることをやらせてあげる。洗濯。掃除。その他雑用」

「わーったよやりゃいいんだろやりゃ」

「そうよ。さてとしゃべってたら眠くなっちゃたわ」

ルイズはあくびをした。

「俺はどこで寝りゃいいんだ」

ルイズは、床を指差した。

「はぁーもういい椅子で寝る」

「そう。あんたがいいならそれでいいわ」

そついいながらも毛布を投げてよこしてくれた。

それからルイズは服を脱ぎ始めた。

「おいおい。何やってんだ？俺は男だぞ？」

「男？誰が？使い魔に見られたって、何とも思わないわ」

「じゃあおめえーはあれだ露出狂だ」

「誰が露出狂よ！」

「おめえ以外に誰がいやがる。わかったらオレが後ろ向いたときに着替えやがれ！」

「わかったわよもう！ー！」

そういつて静雄が後ろを向いているとしばらくして白い布が飛んできた。よく見ると下着だった。

「それ明日になったら洗濯しといて」

「わーっ たよ・・・」

静雄は諦めながら、自分の知り合いのことを思い出していた。

(幽には心配かけてるよなあー。森羅のバカはいいとして門田も心配してくれてつかもなあ？うじむし野郎似合わないのはやっぱりいかもなあー)

「まあ仕方ない。とりあえず寝るか」

そういいながら静雄は眠りについた。

これから静雄の使い魔としての新生活が始まる。

第2話 現状説明（後書き）

何かほとんどルイズの部屋の話で終わってしまいました・・・

次は決闘のところまでは行きたいと思っているので、応援よろしく
お願いします！！

第3話 ゼロと朝飯（前書き）

なんか日に日に文が悪くなっているような気がします・・・

第3話 ゼロと朝飯

次の日

静雄は椅子で寝たためか、痛む腰を押さえながら目覚めた。

「あんまりいい眠りではなかったなあ」

静雄はそう愚痴りながら、ベッドでスヤスヤ眠る可愛らしいご主人様を起こした。

「おい。起きろ。朝だ」

「な、なによ！なにごと！」

「開口一番がそれかよ」

そう静雄が嘆息しているとルイズが言った。

「って誰よあんた！」

「平和島静雄」

「ああ使い魔ね。昨日、召喚したんだっけ」

ルイズは起き上がると、あくびをしながら、静雄に命じた。

「服」

静雄は服を放り投げた。

「下着」

「昨日言つた事覚えてつか？」

「なんだっけ」

「オメエを露出狂にするって話だ」

「それが何よ」

「いやオレには男に下着取らせる時点で、充分変態の才能があるんじゃないかなあと思つてよ」

そう言つて静雄は意地の悪そうな笑みを浮かべた。

いつものルイズならただの平民が何を言おうが、たいして気にもとめないはずだが、寝起きということと何より静雄が放つ妙な威圧感によつてルイズは反論することができなかった。

「分かつたわよ。まったく」

そう言つてルイズがベッドからおり下着を出し、自分で着替え始めた。その間静雄は後ろを向いてたのは言うまでもない。

ルイズの着替えが終わり、部屋を出ると前の部屋から燃えるような赤い髪の女の子が現れた。背も胸も何もかもがルイズと対照的に大きかった。それに褐色の肌が妙な色気を放っていた。

彼女はルイズを見ると、ニヤツと笑った。

「おはよう。ルイズ」

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔って、それ？」

静雄を指差して、バカにした口調で言った。

静雄はぶっ飛ばしてやるうかと思ったが、ここは静かに怒りを噛み殺した。

そんな感じでひと悶着ありながらも、そのまま食堂に着いた。

食堂は見るからに豪華な作りになっており、並んである料理もものすごく豪華だった。

「スゲーな」

そう言って席に座ろうとする静雄にルイズは床を指しながら言った。

「あんたはこっち」

床には貧しいスープと固そうなパンが置いてあった。

「オレにこれを食えと？」

「そうよ」

その言葉に静雄はいい加減キレた。

「ああそうか！分かったよ！食べばいいんだろ食べば！」

そう言つて静雄は、スープを飲み干しパンを食いそしてそれらが入つていた皿を粉々に握り潰した。そのまま静雄は振り返らずに食堂を後にした。ルイズが何か言つてるようだが無視した。というよりぶっ飛ばさなかつたことを感謝して欲しかった。まあそれをルイズに求めるのもなかなか酷なものである。

中庭で静雄はうなだれていた。

「ああ腹減つた・・・」

「どうかなさいました？」

振り向くとメイドさんがいた。

「なんでもねえー」

静雄は適当に言った。

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールのつかいまになつたつていう・・・」

「知ってんのか？」

「ええ。いろいろと聞いていますから。」

女の子はにっこりと笑った。この世界に来てはじめて見た、屈託のない笑顔だった。

「あんたも魔法使いかなんかなのか？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です。貴族の方々をお世話するために、ここでご奉公うさせていただいでるんです」

「そうか」

そういつて静雄は再び前を向いた。

「あの・・・よろしければあなたの名前を教えてくださいてもよろしいでしょうか？私はシエスタといいます」

「オレは平和島静雄だ」

「変わったお名前ですね」

そのとき、静雄のおなか鳴った。

「お腹が空いてるんですね」

「まあな」

「こちらにいらしてください」

シエスタは静雄を連れ立って歩き出した。

「うめえー」

「よかった。おかわりもありますから。ごゆっくり」

静雄は厨房に連れて行かれてシチューを御馳走になっていた。

しばらく雑談しながら食っていた静雄はシエスタに皿を返した。

「ありがとな。うまかった」

「よかった。お腹が空いたらいつでも来てくださいね。私たちが食べているものでよかったですら、お出ししますから」

「サンキューな。何か手伝えることがあったら言ってくれ。何でも手伝うよ」

「え・・・でも」

「遠慮すんな」

「なら、昼にデザートを運ぶのを手伝ってください」

「まかせろ」

そうやって静雄は厨房を後にした。

廊下でルイズを見かけた静雄は、素直に謝り教室に同行した。

静雄はそれを後悔した。

ルイズは授業中に魔法を失敗して、教室を破壊し、使いまたちが大騒ぎになり教室の中は半狂乱だった。静雄とルイズはその後片付けをしていたんだった。静雄はやっとルイズがゼロといわれている意味を知った。

それから時間は過ぎ昼の時間になり静雄はなにやら騒いでるルイズをなだめて、シエスタの手伝いに向かった。

静雄とシエスタがデザートを配っていると、テーブルで騒いでいる少年たちがいた。何でも見るからにキザな金髪の少年が今誰と付き合っているかで盛り上がっているらしい。そんなことはどうでもいい静雄は、先に進もうと思ったが、ギーシュと呼ばれているキザ男のポケットから小瓶が落ちたのでそれを知らせるとギーシュが無視した。聞こえていないのかと思ってもう一度声をかけるとギーシュは言った。

「これは僕のじゃない。君は何を言ってるんだね？」

そんなことを言われて静雄は今自分の言われたことを反芻していた。

（人がせっかく親切にしてやったのにそれをふいにしやがったんだよなあーこいつはあー）

そんな事を考えていると目の前で女の子もやってきてなにやら言い争っている。

その言い争いが終わってギーシュが言ってきた。

「君が軽率に香水の壘なんかを拾ったおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

そんな事を言い出したギーシュの胸元に手が入りそのまま持ち上げた。

「あんだてめえ人がせっかく親切にしてやったのにそれはねえーんじゃねえのかあどうなんだああ？」

「ふんいきなりの暴力とは感心しないな。貴族に対する礼儀を教えやろう！決闘だ！場所はヴェストリスの広場だ。」

「おもしれえ本気でやってやろうじゃねえかあ」

そういつて静雄はギーシュを乱暴に下ろした。

ギーシュたちは取り巻いていた一人を残して外に出て行った。

静雄がシエスタのほうを見ると震えながら言った。

「あ、あなた、殺されちゃう……」

「はぁ？」

「貴族を本気で怒らせたら……」

そう言うと彼女は走って逃げてしまった。

「何なんだいったい」

静雄はそういいながら一人残っていた少年に決闘の場所を聞いた。

外に出て行こうとするとルイズがやってきた。

「何勝手なことやってるのよ！今ならまだ間に合うから誤りなさい！」

「断る！喧嘩を売られたのはこっちなんだ。だったら迎え撃ってやるよ」

そう言って外に向かって歩き始めた。

その後をルイズも文句を言いながら付いていった。

そして決闘が始まる……

第3話 ゼロと朝飯（後書き）

・ 静雄のキャラどころか登場人物皆がおかしい気がしてなりません・

ですが諦めずに書いていきたいと思います。

第4話 決闘！！（前書き）

更新遅れました。すいません。
一応できたので更新します。

第4話 決闘！！

ヴェストリの広場

「諸君！決闘だ！」

ギーシュがそう叫ぶと広場に集まった生徒たちから歓声があがった。

「とりあえず、逃げずに来たことは「能書きはいい！さつさと始めようぜ。」

静雄はサングラスをはずしながらギーシュの言葉に割り込んで相手を挑発した。

「ふん。まあいいだろう。」

そう言うとギーシュは薔薇の杖を振り、青銅のゴーレム『ワルキューレ』を召喚した。

「言うておくが、僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

そんなことを言ってる間にその内の一体が、静雄に向かって突進してきた。

その右の拳が、静雄の腹に『めり込まなかった』もちろん静雄は倒れない。

「は？」

ギーシュは呆けていた。

それもそのはず。青銅のゴーレムが腹に拳を打ち込んだのである。筋骨隆々の人物なら立っていられるかもしれないが、目の前の男はどうだろう。見た目は見慣れない顔つきに、これまた珍しい黒髪に黒目。年は自分とさして変わらないだろう。それなのにどういう訳か倒れない。

そんなふうにはギーシュがあれやこれやと思案してるうちに静雄が話し始めた。

「いてーなこの野郎。いてーじゃねえーかこの野郎オオオオ!!」

後半絶叫になりながら静雄は目の前のゴーレムを殴り「飛ばした」

飛ばしたゴーレムはギーシュのすぐ横に落ちてきた。

「は?」

本日二度目の呆けである。まあ無理もない。自分が自身を持って作り出したゴーレムが数メートルも殴り飛ばされたのである。これが呆けずにはいられない。

近くで見えていて、静雄が腹に拳をくらっているのを見て反射的に飛び出してきたルイズもまた目の前の光景に我が目を疑っていた。

(ギーシュはドットだけどそのギーシュが作り出したゴーレムにしたってただの平民に殴り飛ばされるなんて・・・あいつ一体なんなのよ!)

静雄は顔に青筋を浮かべながら走り出した。

これより静雄による『静雄無双』が始まる……

「はっ……ふん、行け！」

ギーシュは正気になりながらゴーレムを走らせた。

「うおおおおおお！」

静雄は叫びながら目の前にいたゴーレムを持ち上げてこちらに向かってくるゴーレムに向かって投げ飛ばした。投げ飛ばされたゴーレムは集団の中の一体に直撃しそのままぶっ飛んでいった。

「………ば、か、な………」

ギーシュはすでに放心状態だった。

そんなことも露知らず静雄はゴーレムをぶっ飛ばしていた。

「うおおおおおらあああ……！」

静雄は叫びながらゴーレムに攻撃を加えていった。

殴って『ぶっ飛ばす』

蹴って『ぶっ飛ばす』

投げて『ぶっ飛ばす』

その繰り返しにより周りにはゴーレムだった残骸が散らばっていた。まあ無理もない。一発一発が必殺の威力を持つ攻撃を繰り返し受けたのである。こうなっていなければおかしい。

「……………」

静雄の剣幕に恐れ周りの生徒たちはすでに無言だった。

「……………」

かくいうギーシュもまたその一人だった。

静雄は周りの空気が凍っているのも気にせずギーシュの方に歩を進めていた。

「お、おい……わかったから！僕の負けでいいから！だから許してくれ！」

ギーシュは目の前に迫り来る『恐怖』に対して後ずさりながら許しを請うしかなかった。だが当然静雄がそんなことに耳を傾けるわけも無く静雄はギーシュの目と鼻の先に歩いきた。

「許してくれねえ……うぜえーあーうぜえーだったらオレにけん・か・をつるなあああああー！！」

そう叫びながら静雄は右の拳をギーシュの顔に叩き込んだ。

「どがっ」「っ」という音とともにギーシュは叫び声をあげること無

く10メートルほどぶっ飛び、さらに地面に落ちた後も「ズザー」といいながら5メートルほど転がっていった。

ここに決闘は終了を迎えた……

静雄はサングラスをかけながら今ぶっ飛ばしたやつを眺めていた。すると人垣のほうから金髪の見事な巻き毛の女の子が駆け寄って何か言ってるのが見えた。

「戻るか……」

そんな光景を見ながら静雄はつぶやき後ろに振り返った。そこにはルイズがいた。

「なんだお前か」

「なんだとは何よ！それよりシズオあんた大丈夫なの？」

「ぶつやつと名前呼びやがったな……」

静雄は名前を呼ばれたことを少しうれしく思いながら小声でつぶやいた。

「……ん？なんか言った？」

「いや別に」

「まあいいわ。で、大丈夫なの？」

「何が」

「何がって・・・あんだ腹にゴーレムのパンチくらってたじゃない」

「あんなもんたいしたことねえー」

「そう、ならいいわ。それにしてもあんだなんなのよあの怪力」

ルイズが歩きながら静雄に疑問に思ったことを聞いた。

「別に対したことじゃない。」

静雄はそっけなく言った。

「ふんならいいわ。いきましよう」

そう言いながら静雄とルイズは教室のほうに歩いていった。

そんな二人を見ている二人の教師がいたことに二人は気づくことは無かった。

第4話 決闘！！（後書き）

すいません更新遅れたのには訳がありまして、活動報告にも乗せたいのですがちよつと勉強してないのがばれてですね、そっちに専念しなくてはいけないので遅れてしまいました。とりあえず春休みが終わったら続きを書こうかなと思います。

気分転換に別の小説も書いてみようかなあ・・・

第5話 伝説の剣との遭遇（前書き）

すいませんすいません。遅れてしまって申し訳ありません。
いろいろありましてね・・・

まあ駄文ですが一応できたので話しはその後・・・

第5話 伝説の剣との遭遇

静雄とルイズを見ていた二人のオッサン。もといオスマン学園長と教師のコルベールは顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

コルベールは震えながらオスマンの名を呼んだ。

「うむ」

「あの平民勝ってしまいましたか・・・流石伝説の使い魔『ガンダールヴ』といますか・・・正直な話をしますと私はあの平民に対して何というか本能的に恐怖を感じました・・・」

「うむ。わしもじゃ。彼だけは敵に回してはいかんのう・・・それにしても伝説の使い魔、間違いではなさそうじゃのう」

「はい。伝説ではあらゆる『武器』を使いこなし、敵と対峙したとあります。しかもその強さは千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかつたとあります！早速王宮に連絡して、指示を仰がないことには・・・」

「それには及ばん」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』の強さは君がさっき言っ

たとおりじゃ。そんなものを王宮に渡してしまったなら・・・答えは分かるじゃろう?」

「確かに王宮に渡してしまっただけは戦争の道具に使っやも知れませぬ」

「そうじゃ。よいかミスタ・コルベール。この事は他言無用じゃぞ」

「はい!かしこまりました!」

静雄とギーシュが決闘を行ったその日の夜。

静雄は椅子に座りながら寝ていたのだが、今日はなかなか眠ることができなかつたので散歩をすることにしたのだが扉を開けるとでかいトカゲ。もといサラマンダーがいた。

「おまえ確かキュルケとかいう赤髪の女の使い魔だったよなあ?どうしたんだ?」

静雄が聞くとサラマンダーは静雄の服を引っ張りながらキュルケの部屋に連れ込もうとした。

「やめろって。オレは寝てる女の部屋に入るような趣味はねーってそう言いながら静雄は腕の辺りをひっぱっているサラマンダーを払いながら言っていると、ルイズの部屋の戸が開きルイズが出てきた。

「うっさいわねー。って何やってんのよ。あんた」

静雄がサラマンダーを振り払っているのを見てルイズが聞いてくる。

「いや。こいつが散歩に行こうとしたら急にひっぱてきやがったんだ」

「そう。ならさっさと部屋に戻るかなんかしたほうがいいわよ」

「なんでだ？」

「そのうち分かるわよ」

「????？」

静雄はルイズが言っていることが理解できず？マークを浮かべながら部屋に戻っていった。

「それにしてもキュルケが狙ってくるとはね・・・シズオ。明日武器買いに行くわよ」

「はあ〜武器い〜？そんなの必要ねえーよ」

確かに静雄は下手な武器を使うより素手で戦うほうが強い。静雄のパワーに武器のほうがついてこれないためである。

「あのね。あんたみたいな平民武器でも持たなきゃ格好がつかないじゃないの」

「そんなもんかあ？」

「そんなもんよ」

「そうか」

「明日は虚無の曜日だし明日買いにいくわよ」

「わーっつたよ」

そんな会話をしながら静雄とルイズは眠りについた・・・

そのころキュルケはというと・・・

「あーあ惜しかったわね。明日は虚無の曜日だし明日が勝負よ！
！」

キュルケはガッツポーズをしながら窓に群がる男たちに向かって魔法をぶっ放しながら、キュルケもまた眠りについた・・・

虚無の曜日。ブルドンネ街。

「にしても狭い道だなおい」

静雄は周りの珍しい店を眺めながら言った。

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「まじか」

二人が話しながら歩いていけると目的の武器屋の前に着いた。

「ずいぶんきたねえー店だな」

「いいから入るわよ」

外と一緒に中もずいぶん汚かった。

「貴族の旦那。うちはまっとうな商売」客よ」「

ルイズは店主の言葉に割ってはいった。

「そうでやしたか。それは失礼しました」

「この使い魔に剣を見繕って頂戴」

「わかりました」

店主は静雄をジロジロ見ていいながら店の裏に消えていった。

「これなんてどうでしょうか」

店主が持ってきたのは見事な剣だった。全長1・5メートルはあろうかという大剣だった。

「やつこさんにもちょうどいいこの店一番の業物です」

「それはいくら」

「何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？おやすかあ、ありませんぜ」

主人はもったいぶって柄に刻まれた文字を指差した。

「わたしは貴族よ」

「エキュー金貨で二千。新金貨なら三千」

そんな風に押し問答をしている二人を静雄は人事のように見ているとどこからか声が聞こえてきた

「生言つてんじゃねー」

静雄とルイズは声のしたほうを向いた。主人が頭を抱えた。

「おめえ自分を見たことがあるのか？その体で剣を振る？おでれーた！冗談じゃねえ！おめえにや棒つきれがお似合いさ！」

「あんだとゴラアアア！」

静雄はいきなり悪口を言われたのでキレた。確かに客観的に見れば静雄は背は高いが痩せ型の優男に見えるかもしれないが、その肉体は壊れに壊れ進化を重ねたまさに一世代での進化を体現した鋼のような肉体である。

「わかつたら、さつさと家に帰りな！おめえもだよ！貴族の娘っ子

「！」

「失礼ね！」

静雄はドンツドンツと声のする方に近づいた。

「なんだよ。誰もいねーじゃねか！」

「おめえの目は節穴か！」

静雄は目の前にある剣を持ち上げた。その剣から声が発せられていたのだ。剣が何かを言っているがもう静雄の耳には届かなかった。

「マジか」

だが静雄が驚いたのは剣が声を発していることではなかった。いや正確には多少は驚いていたが静雄にとってはたいしたことではなかった。静雄は剣に対して全力で握っているはずだった。だが何の変化も無かった。静雄に全力で握られれば普通の剣ならひしゃげているはずだった。

「おもしれえー。おいルイズ。この剣買ってくれ」

「え~~~~~。そんなのにするの？もつと綺麗でしゃべらないのになさいよ」

「いいだろ別に。しゃべる剣なんておもしれえーじゃねえーか」

「それだけじゃないの」

ルイズはぶつくさいいながら店主に値段を尋ねていた。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

静雄はポケットからルイズの財布を取り出すと、中身をカウンターにぶちまけた。金貨がじゃらじゃらと落ちる。店主は慎重に枚数を確かめると、頷いた。

「毎度。どうしてももつるさいと思ったら鞆に入れればおとなしくなりませあ」

「どうも」

静雄は剣を受け取ると剣に聞いた。

「おまえ名前なんていうんだ？」

「デルフリンガーだ」

「俺は平和島静雄だ。よろしく頼むぜ」

「おうよ『使い手』のあんちゃん」

「『使い手』？」

「自分の実力も知らんのか。まあいい。よろしくな」

二人と一本はそんな会話をしながら店を出て行った。

そんな二人と一本を陰から見ている二人組みがいた・・・

第5話 伝説の剣との遭遇（後書き）

ええ、遅れたのは私情でして、クラス分けにより仲のよかった友人とはなれてしましまして、自分は人見知りの性格なのでクラスに友達ができなくてそのせいでちょっと執筆に手が回らないほどショックを受けてしまったとのことです。はい。
すいません。心が弱くて……

ちなみにまだ友達いません……（泣）

第6話 武器屋にて（前書き）

すいませんした！！！！二ヶ月以上間を空けてしまいました。しかも短い・・・それでも一応できたので読んでもらえたらうれしいです。

第6話 武器屋にて

二人と一本を見ている二つの影があった。キュルケとタバサである。キュルケは二人が見えなくなると、武器屋の中 に入って行った。主人はキュルケを見て目を丸くした。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ！」

「ねえご主人」

キュルケは色つぼく微笑み、主人を誘惑するように、言った。

「今の貴族が、何を買っていたかご存知？」

キュルケの色気に押されて、主人は顔を赤らめる。色気が熱波として、襲ってくるようだ。

「へ、へえ。剣でさ」

「なるほど、やっぱりけんね………どんな剣を買っていたの？」

「へえ、ボロボロの大剣を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「お連れ様が気にいったようで。へえ」

キュルケは、手を顎の下にかまえ、考えはじめた。

(彼が気にいったねえ)。さてどうしようかしら)

「若奥様も、剣をお買い求めで？」

「(せっかくだからこの店の一番を貰おうかしら。それなら彼も喜んでくれるで

しょうし。)ええ。この店で一番いい剣をくださいな」

主人はもみ手しながら、奥に消えた。果たして、持ってきたのは先ほどルイズと

静雄に見せた立派な大剣だった。

「あら。綺麗な剣じゃない」

「若奥様、さすがお目が高くていらっしやる。何せこいつを鍛えたのは、かの高

名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で。魔法がかかっているから鉄だって一刀

両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？」

キュルケは頷き。主人に確認をとった。

「それでこの剣がこの店で一番いい剣なのよね？」

「へえ。そつでございやす」

その答えを聞き、キュルケは満足そうに再び頷き主人に言った。

「おいくらっ」

主人はキュルケを値踏みした。どうやら羽振りはかなりよさそうだ。

「へえ。エキュー金貨で三千。新金貨で四千五百」

「ちょっと高くない？」キュルケの眉があがった。

「へえ、名剣は、釣り合う黄金を要求するもんでさ」

キュルケはちょっと考え込むと、主人の体に顔を近づけた。

「ご主人……、ちょっとお値段が張りすぎじゃございませんこと？」

顎の下をキュルケの手で撫でられて、主人は呼吸ができなくなった。

ものすごい色気が、親父の脳髓を直撃する。

「へ、へえ……名剣は……」

そのようなやりとりをし続けた結果……

「へえ！千で結構でさ！」

結局主人はキュルケに千という破格の値段で売ってしまった。その結果主人はそ

の日一日店を閉じる事になってしまったのだがまあ余談である。

第6話 武器屋にて（後書き）

いろいろありまして更新遅れてしまいました。ええいろいろあったんですよいろいろと・・・

と、言い訳を言っても始まらないので、本編についてです。まず読んでもらえたとおり、短いうえに原作とほとんど一緒です。ええ自覚はしていますとも。一応これは作者のリハビリみたいなものです。これからはできるだけ早め早めに書いていきたいと思っていますのでよろしく願います。後感想待ってます！

では、本日はこの辺で失礼させていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676k/>

トリスティンで一番喧嘩を売ってはいけない男

2010年10月11日20時06分発行